

核兵器禁止条約第2回締約国会議

核兵器の人的影響に関するテーマ別討論

パネル討論1（2023.11.27午後3時～6時）

「なぜ核兵器の人的影響が禁止の根拠となるのか？新たな研究と21世紀の展望」

木戸季市 <パネリスト4人のうちの1人として、4番目に発言>（文字おこし：工藤）

<最初の発言>

広島、長崎に原爆が投下された、その原爆は何をもたらしたか。まず命を奪いました。かろうじて生きた人々も、初期症状、原爆症などなどで今日まで病や死の恐怖と闘っています。

どのように被爆者は命を奪われていったか。自分が死ぬのがまったくわからないままに命を絶たれたのです。また、家族に看取られた死者はわずか4%。そのほかは、誰にも看取られず、遺骨さえどこにあるのか、どういう状況で亡くなっていったのかわからない。そんな死が、人類史上あったでしょうか。こんな死は人間の死と言えない。

人間として死ぬことも人間らしく生きることも許さない、そういう核兵器をなくすことが、人類を守ることです。

なぜ、「唯一の戦争被爆国」と自称する日本政府が、核兵器禁止条約に署名しないのか。日本国民の8割の人々は核兵器禁止条約に署名しろと言っている。にもかかわらず、オブザーバー参加せず、議論にも参加しない。核抑止論の立場に立ち、アメリカの核兵器によって自分の国を守ってもらっているんだという、そういう考えに基づいて、この禁止条約に署名も批准もしない、会議にも参加しない。その背景には、国を守るのは武力だという考えがあるように思われます。

私たち被爆者は、世界のいろんな諸問題の解決というのは武力ではなされない、時間はかかるかもしれないけれど、対話、話し合いによってのみ解決できると考えています。

私は、4度被爆者になりました。1回目は、1945年の8月9日です。そこで見たものは、本当に何も無い世界です。

2回目は、1952年、アメリカによる占領が終わったときです。原爆被害を隠蔽し、報道を禁止していたアメリカの禁止が解かれ、初めて原爆被害の写真集が発行されました。それによって、大きく2つの話が広がりました。1つは、被爆者はやがて白血病になって死ぬ、ということ。2つ目は、被爆者は障害者を生む、ということです。それは、中学生だった私に不安を与えました。日常的には不安の中で生きているわけではありませんが、何かがあると不安になるということがありました。

3回目は、1991年、被団協運動に参加した、ということです。

そして、今、4回目と思っています。

結成宣言で被団協はこう言っています。「被爆から11年経って、ここにこうやって集まった、それは、今までの苦しさや愚痴を出し合って慰めあうためではない」と。「たちあがって闘うためだ」と。そして、「世界に訴えるべきものは訴え、国に求めるべきものは求め、かくして私たちは自らを救い、自らの体験をとおして人類の危機を救おうという決意を誓い合ったのであります」と。

そしてそれから今日まで、「ふたたび被爆者をつくらない」ために、核兵器をなくすこと、戦争を起こさないことを訴え、原爆被害をもたらした日本政府に対し償いをするを求めてきました。

日本政府は、基本的に応えていません。原爆被害者のすべてを援護の対象とするのではなく、限定した狭い範囲を被爆者とし、それ以外の原爆被害者は一切認めていません。

いくつかの援護施策の改善がありました。それは私たちの運動によって少しずつ改善させてきたものです。私たちは、核兵器をなくすための国際的な活動と合わせて、徹底してシンポジウムや調査を繰り返してまいりました。その結果、日本政府が言うような被害だけではなく、次々と被害が明らかになってきました。しかし、日本政府はそれを認めようとしません。

それでも、まったく無視することはできず、一定の援護施策を行なっています。その内容は、健康診断と医療と、手当と福祉の4種類です。始まった当初は、年齢制限や所得制限がありました。運動によって少しずつ広がってきているというのが現状で、十分に行なわれているわけではありません。それでも、運動の中で要求してきたことの援護の内容が、これからの核被害者への援護について役立つものがあるかもしれません。そういうことで寄与できればいいと思っています。

武力によって社会に起こっている諸問題は解決することはできない、対話によってのみ解決できる、と思っています。

個人的な考えですが、対話には、言葉による対話だけではなく、五感をとおした対話がある、それは人間が人間になる最初の行為だったのではないかと。それに対して戦争というのはずっと後の行為、国家ができてからではないかと思えます。やはり、本来の人間に帰る時ではないか。対話によってお互いを大切にする、信頼することによってそれは可能なのだと。その具体的な場が今日のこの会議だと、私は確信しております。

ありがとうございました。

< 討論の中での発言 >

・事実に基づいて判断すること。科学という名のものにと科学的でないことを宣伝することがたくさんあるのではないかと思いますので、本当に確実な、なぜそれが起きているか、それを説明するのが科学だと思うんですけど、科学的なデータが示していないから影響ありませんなどという理屈が出ると…そのへんのところ、しっかりと確認しあって、隠蔽とか捏造とかに手を貸さないでいただきたい。切なるお願いです。

・今思い出しましたのは、福島原発が起きたとき、私は、核に関わる研究者が増えなければいけない、と思いました。どうやって被害から人間を守るかということが求められている、と思ったんですけど、放射線と核の研究者が激減したんですね。ショックでした。きちんと研究することが大切。事実を歪曲するための研究があるように思いますね。そうでなくて今行なわれているように、真剣な議論がなされるようなことが被爆者の願いだと強く思います。

・黒い雨の問題がありまして、黒い雨っておわかりでしょうか、原爆が投下された後黒い雨が降って、放射線に汚染されたという地域がいっぱいあるわけですけども、それは援護の対象になってこなかったんです。それで研究その他いろいろ…「私たちが原爆の被害者なん

だ」という裁判があって、画期的な判決が出されました。明らかに原爆の被害ではないということが立証されない限り、それは原爆の被害であると認定しなさい、という素晴らしい判決が出たわけです。そういう中で、国は、本当にどうすべきかということで、「本当に」といういい方は悪いんですが、どうするか、という検討会を作りました。お医者さん、私たちが推薦する気象学者、そして被爆者の代表として私と、広島大学のお医者さんも含め、いろんな専門家の方が入りました。その検討会が本当にきちんと応える検討会であるのかどうか。専門部会もつくってもものすごくお金をつぎ込んだけれども、もう、もはや、地質の調査では、ひとつの例ですけど、地質の例では、それは広島に落とした原爆の影響であるということは不可能だと。それ以降の原水爆の実験で、地質はもう汚染されて、広島の影響だと特定することは不可能だという見解、そういう事実があるわけです。だけど、それを国はやろうとしている。地質調査にもものすごいお金をかけようとしている。というようなことがあって、国が検討会を作ったのだけれども、その、あまりの非科学性というか、私はそこに参加していてそう思うんですけど、ちょっとその検討会が長い間開かれていない、国はどうか行き詰っているというような、そういう問題もあります。さきほど原水協の土田さんが話しましたが、本当に地道な、事実を本当に掘り起こして、そうした研究が本当に大きく力を発揮するという例があります。政策的に結論を先に求めようとするためのデータ集めとか、そういうことが行なわれているのではないか、そういうことを感じます。事実にして科学的に検証していくということが非常に重要だと思います。それから、いろんなところで科学的データが不足しているといいますか、原爆の影響であると断定できる基準を作って、認めない。例えば、被爆者と非被爆者を対象にして、変わりが無い、調査結果は変わりが無いということを使うんだけど、よくその地域を考えてみたら、先ほど言いましたように、被爆地域を狭く限定している、「非被爆地」と設定したところと比較しているんだけど、実はそこは被爆地なんだと、だからデータは似たのが出てあたりまえなんだと、そういった問題もひとつひとつ、本当にそれが科学的なのかどうかということは厳しく監視していくとか、そういうことが必要だということを感じています。

・ありがとうございます。私はね、核兵器の研究というのは非常に重要だし、中心になっていると思いますが、それぞれの被害が始まってから今日までの被害の実態というのはどうなのかということ、それから、その被害をうけた人々が、どのように運動を始め、人間らしく生きることを求めてきているか、そのことをですね、明らかにしていく必要があるだろうと感じました、今日の話し合いを聞きまして。もう一つは、ジェンダーの問題で、男性女性の肉体の問題ではなくて、それぞれの国による社会環境、日本では家族制度の維持のために女性が家におるべきだ、そして男が働くんだ、極端なことを言いますとね、人間が国の構成単位ではなくて、家が構成単位なわけです。これは明治民法のもとでそうになっていたわけです。その意識が現在も、日本の保守政党の女性に強いんです。だから、女性自らが人間として生きようという姿勢を感じられない。そういう女性が戦争を支援する人が多いという実態があります。その実態をご紹介すると合わせて、社会的な実態として、今言いました被害の問題とジェンダーの問題も捉えていく必要があるのではないかと、強く感じました。ありがとうございました。